



長唄 小鍛冶

上演 天保三年(一八三二)九月

作詞 二代目劇神仙

作曲 二代目杵屋勝五郎

〔本調子〕

稲荷山 三つの燈火 明らかに

心を磨く 鍛冶の道

子狐丸と末の世に残す其名ぞ著るき

夫 唐土に傳へ聞く 龍泉太阿はいざ知らず

我 日の本の金工 天国 天の座 神息が

国家鎮護の劍にも 優りはするとも劣らじと

神の力の合槌を 打つや丁々しつていころり

餘所に聞くさへ 勇ましき

打つと云ふ 夫は夜寒の麻衣

をちの砧も音添へて 打てやうつつの宇津の山

鄙も都も秋更けて 降るや時雨の初紅葉

焦がるる色を金床に

火加減 湯か減 秘密の大事

焼刃渡しは陰陽和合 露にも濡れて薄紅葉

染めて色増す金色は 霜夜の月と澄み勝る

手柄の程ぞ類ひなき 清光凜々

麗しきは若手の業物 切者と

四方に其名は響きけり

補注

作詞者の劇神仙は「号」である。初代は天明年間に活躍した狂言作家 宝田 寿来が用いている。二代目は宝田寿助とも宝田寿阿弥とも言われている。

(鹿倉秀典氏 近世文芸心より)

「寿阿弥」は出家後の名前であって、本名は真志屋五郎作で神田新石町にあった、水戸藩御用達の菓子商であつたらしい。宝田寿来に師事し長唄、浄瑠璃の作詞を成す江戸後期の歌舞伎作者である。

令和三年七月二十九日

大中臣正比呂 複記